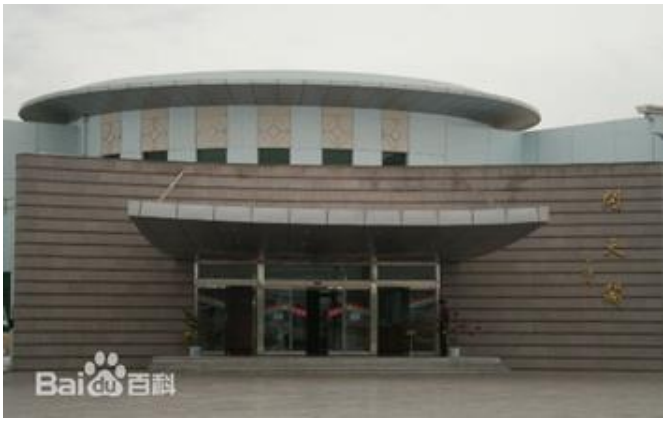
序章

2003 年 10 月 15 日早朝、中国西北部の甘粛省酒泉市近郊に位置する酒泉衛星発射センターの問天閣は、人々の熱気と緊張に包まれていた。問天閣は、ロケット打ち上げ施設である酒泉衛星発射センターに付置されている施設で、宇宙飛行士の飛行・任務の訓練施設、生活施設、記者会見場などがある。戦国時代の楚の詩人である屈原の「問天（天に問う）」という語句に由来し、宇宙飛行士が宇宙の神秘を真摯に追求することを示唆している。



問天閣の正面　©百度

午前 5 時 20 分からは、中国共産党のトップである胡錦涛総書記の臨席の下、中国初めての有人宇宙飛行の壮行会が始まり、中国人の宇宙飛行士第一号となるべく楊利偉飛行士が、「精神を集中してすべての使命をしっかりと実行し、祖国中国とその人民の期待に応えたい」と、力強く意図表明を行った。

中国の国家威信をかけたプロジェクトでもあり、中国の最高幹部である中国共産党中央政治局常務委員会の常務委員 9 名全員が、この打ち上げを酒泉と北京で見守っていた。前年の 2002 年 11 月に開催された第 16 回中国共産党全国代表大会において、江沢民から共産党トップの地位を継承した胡錦涛総書記であるが、日が浅く権力基盤がまだ十分に固まったとはいえない状況が続いていた。その意味でこの打ち上げは、胡錦涛体制を盤石なものにするためにどうしても成功しなくてはならないものであった。酒泉では胡総書記に加え黄菊国務院副総理、呉官正共産党中央紀律検査委員会書記ら 3 名の常務委員が、北京航天飛行控制センターでは温家宝国務院総理ら 6 名の常務委員が、かたずを飲んで打ち上げを見守っていた。

5 時 30 分、楊飛行士は銀白色の宇宙服に身を包み、李継耐有人飛行総管理者（中央軍事委員会委員、人民解放軍総装備部部長）に最終的な確認を求めた後、射場のロケットに向かった。6 時 15 分、楊飛行士は射場のロケットに搭載された宇宙船「神舟 5 号」に着座した。船内では打ち上げ前の百項目以上にわたる準備・確認作業が、地上ではコントロールセンターの機能管理や楊飛行士の生理データのモニタリングが併せて行われ、すべてが正常に

推移した。9時きっかりに、神舟5号を載せた中国国産ロケット「長征2号」が轟音とともに打ち上げられ、9時10分には神舟5号がロケットから切り離されて、無事に地球を周回する所定の軌道に投入された。



神舟5号の打ち上げ　©百度

船内には、中国国旗、国連旗、2008年に開催予定の北京オリンピックの旗、中国初の有人宇宙飛行の記念切手などが搭載された。神舟5号は、およそ21時間にわたり周回軌道で地球を14回周回した。

翌10月16日の5時過ぎに、北京航天飛行控制センターから地球への帰還指令が発せられた。神舟5号は、その後徐々に飛行高度を下げ、6時23分に大気圏に突入した。神舟5号が着陸した場所は、内モンゴル自治区首都フフホトから約80キロメートル北方にある四子王旗であり、楊利偉飛行士が宇宙船から地上に出た直後に、温家宝総理から祝福の電話がなされた。中国が欧州主要国や日本を追い抜き、ロシア、米国に次いで世界第3番目となる有人宇宙飛行技術を手に入れた瞬間であった。

旧ソ連がボストークによりユーリイ・ガガーリンを打ち上げたのは1961年4月のことであることや、米国がアポロ11号によりアームストロング船長らを月へ送ったのは1969年7月であることを考えると、2003年の初有人飛行成功はかなり遅れて達成されたものである。しかし、中国の指導者や国民は熱狂的にこの成功を歓迎した。

中国の宇宙開発は他の先進諸国に比較すると遅れてスタートしており、さらに1966年から10年間にわたり文化大革命という政治的・社会的な大混乱の時代を経験していることを考えると、米国と旧ソ連は別格であり、当面の競争相手はフランス、ドイツ、英国等の欧州

勢や近隣の日本であった。これら欧州勢や日本は、自らのロケットにより有人宇宙飛行を成功させていない。宇宙開発は科学技術のいろいろな要素を組み合わせて実施されるものであり、いわば総合的な科学技術開発である。中国は科学技術の面で欧米諸国や日本などに後れていると常にいわれてきたが、中国国民はこの神舟 5 号の成功により科学技術でこれらの国々を凌駕したという思いを強くしたのである。

文革後の経済低迷期を経て、国家指導者の鄧小平が深圳や上海などを視察し南巡講話を発表したのが 1992 年 1 月であり、それ以降中国は急激な経済成長を開始した。2001 年には WTO に加盟し、神舟 5 号打ち上げが成功した 2003 年は 2 桁の経済成長が続いていた時期であり、2010 年には日本を GDP で追い抜いて世界第 2 位の経済大国となっている。その意味でもこの有人宇宙飛行成功は国民にとって、一流国への仲間入りの象徴でもあった。

一方、米国や旧ソ連の流れを汲むロシア、さらには欧州諸国や日本の宇宙開発関係者は、中国の有人宇宙飛行の成功をそれなりに評価するものの、宇宙開発が総合的な科学技術開発であり有人飛行技術だけで判断できないことなどから、現在のところ中国の宇宙開発全般を比較的冷めた目で見ているように見える。そこで本書では宇宙開発をいくつかの分野に分け、先行した米国やロシアなどのこれまでの開発の歴史を概観し、中国の開発の歴史と現状や将来計画を述べたうえで、中国と他の宇宙先進国の技術的な比較を通して、中国の宇宙開発の実力に迫ることを考えた。